竜王町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集

西山１号墳発掘調査報告書

1999. 3
山梨県竜王町教育委員会

序　文

竜王町は甲府盆地のほぼ中央に位置し、

南に富士山、西には釜無川が流れ、赤坂台地以外は緩やかに傾斜する平坦な土地であります。

また、甲府市に隣接しており、近年人口が急増し都市化が進んでおりますが、古墳、信玄堤などもあり歴史豊かな町でもあります。また、県史跡に指定されている中秣塚古墳の保存整備も進み、平成 12 年には皆様方にご見学していただけるよう計画しております。

この報告書は、西山１号墳発掘調査についてのまとめたものです。

今後、この資料をもとに様々な分野で活用していただければと考えています。

最後に、今回の発掘調査に協力していただきました関係各位に改めて厚く御礼申し上げます。

平成１１年３月　　竜王町教育委員会

教育長　廣瀬 洋

例　　言

1　本報告書は、平成１０年度に竜王町教育委員会が実施した、西山１号墳発掘調査及び両目塚遺跡試掘調査の報告書である。
2　発掘調査は、竜王町の経費負担と文化庁・山梨県からの補助金を受けて竜王町教育委員会が行った。
3　調査体制は別記とおりである。
4　発掘調査及び出土遺物の整理、執筆は、皆川洋（町教育委員会文化財担当）が行った。
5　西山１号墳の保存状態が非常に危険なため、短期間で石室及び墳丘の調査が終了できるように、測量及び図面作成は（株）フジテクノに委託して行った。
6　遺物、図面については、竜王町教育委員会に保管してある。
7　西山１号墳発掘調査に際し、下記の諸氏、機関からご協力、ご教示をいただいた。記して感謝したい。
大塚初重、坂本美夫、保坂康夫、小林広和、十菱駿武、大嶌正之、畑大介、吉岡弘樹、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県考古博物館、山梨県教育委員会学術文化財課、財団法人山梨文化財研究所、町文化財保護審議会
8　発掘調査参加者は次のとおりである
石川弘美、長井和久、村松正巳、根岸利昭、和田弘行

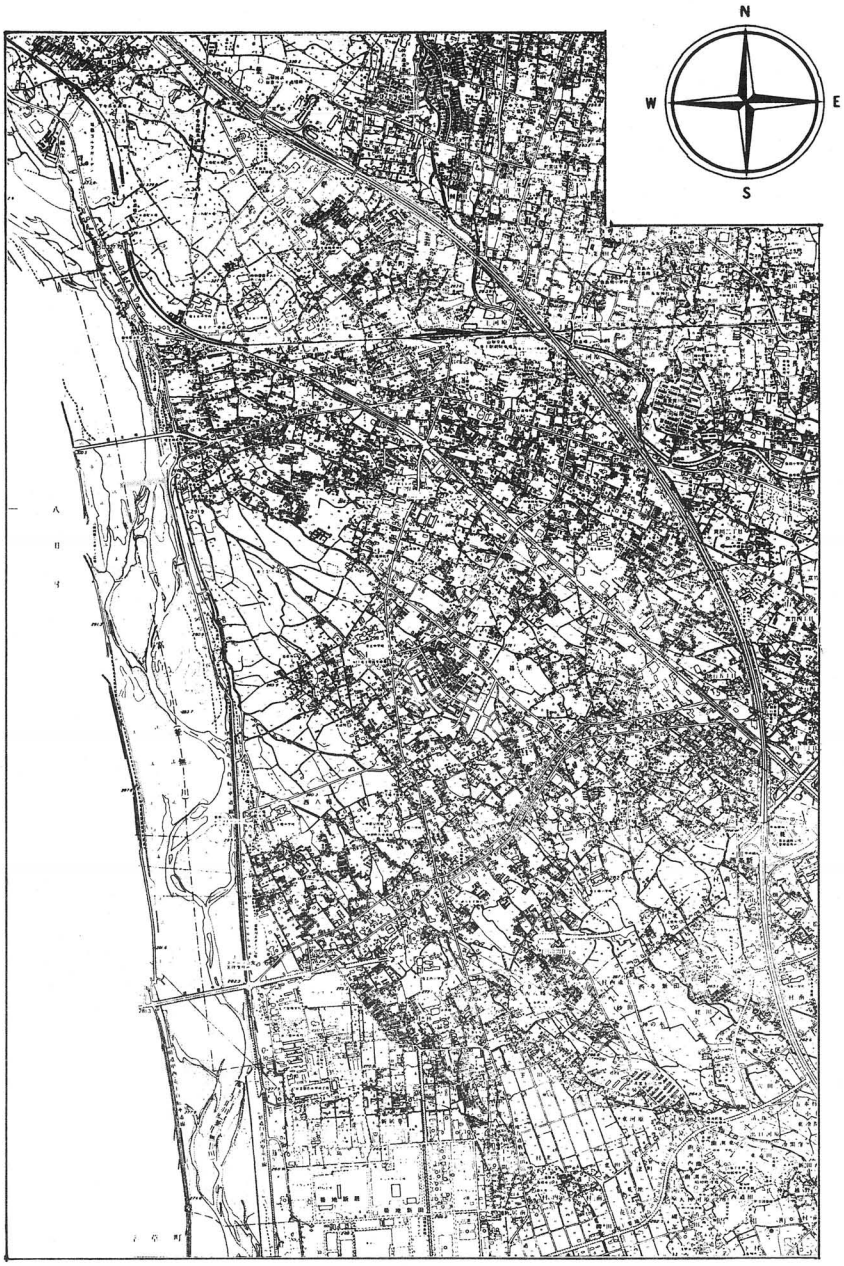
第１章　周辺の遺跡と環境

西山１号墳は、山梨県中巨摩郡竜王町竜王地内に所在し、茅ヶ岳から延びた南端の日照条件に恵まれた通称赤坂台地上に立地する。

竜王町は東西３,430m、南北4,830m、面積１２平方キロメートルあり、北西から南東に緩やかに傾斜する平坦な土地で、西側には釜無川が流れている関係もあり水量は豊富であるが、古くは氾濫が頻繁に起こっていたため砂礫が多く堆積した地層になっている。本町の北端は台地（通称赤坂台地）になっており、甲府盆地が一望できる環境である。しかし貢川と釜無川に挟まれているにもかかわらず台地のため、水量は少なく農耕には適していなかったためか、あまり水を必要としないものが栽培されていた。近年、県庁所在地である甲府市と隣接しているためか、高度成長の波にのり近年急激に人口が増加した。このため、多くの田畑が宅地となり赤坂台地も様々な開発が行われ、赤坂台地上にも住宅や工場が多くなってきている。

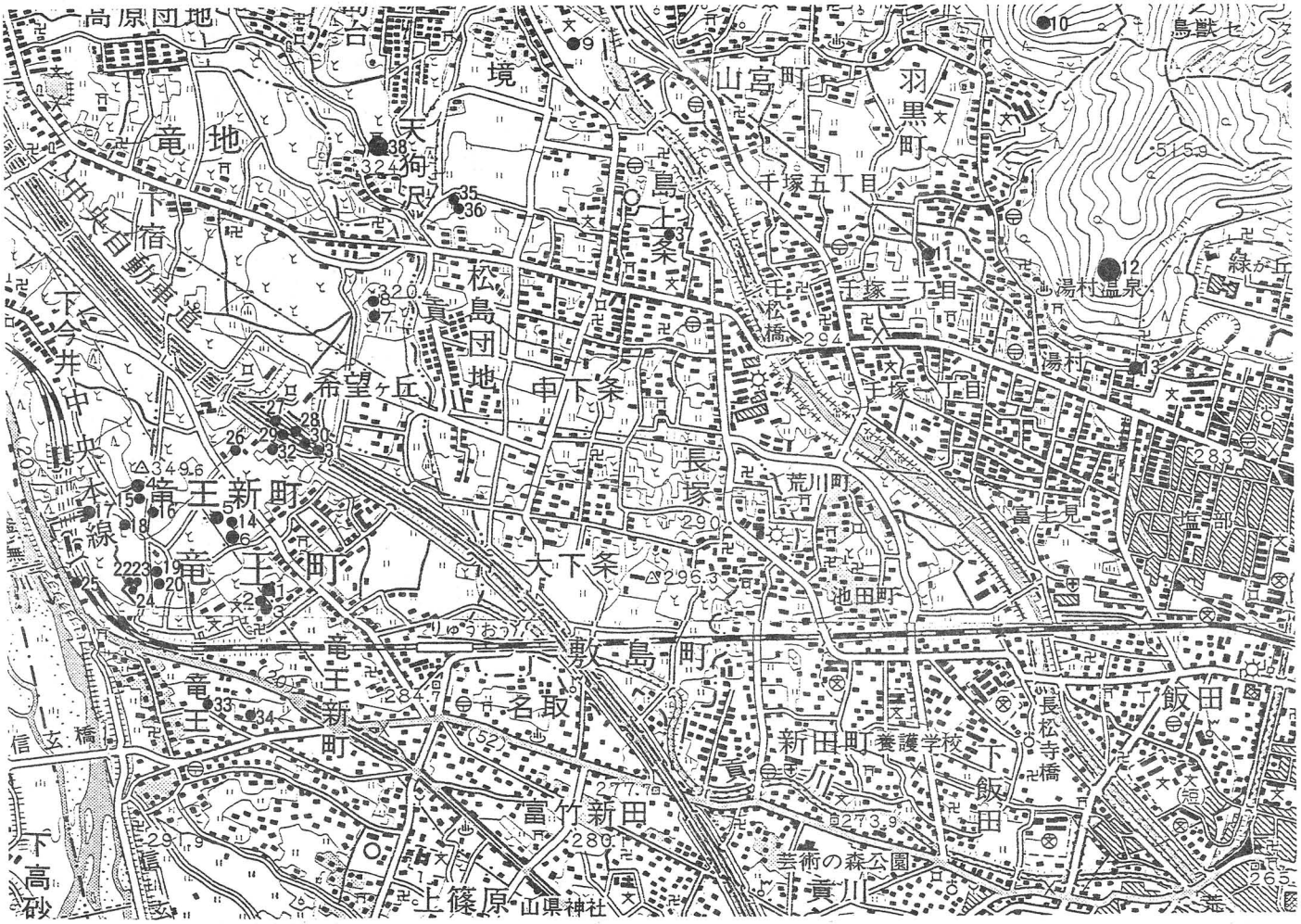
このような環境のなか、赤坂台地及びその付近には古墳をはじめ縄文時代から中世にかけての遺跡が多く分布している。

赤坂台地には西山１号墳をはじめとして、多くの古墳が点在していたが、ほとんどが消滅している。また、文献にも数基が紹介されているだけである。中央自動車道建設に際しては、県が双葉町の古墳も含め５基の古墳の調査を行い、出土遺物は山梨県考古博物館において管理保管している。また、中秣塚古墳が県史跡に、



第1図 遺跡位置図

狐塚１・２号分墳は町の史跡に指定されている。台地の東側には方形周溝墓が検出した縄文時代から弥生時代にかけての金の尾遺跡、観音座像が出土した松の尾遺跡などの住居址、また、狐塚古墳、無名古墳などの古墳が点在し、その東部甲府市湯村・千塚に加牟名塚古墳、万寿森古墳など大型古墳をはじめ大小多くの古墳が点在している。台地の北側に目を向けると赤坂台地と地続きの登美坂にある往生塚古墳、無名１号墳、その北には天狗沢瓦窯跡がり、大塚古墳は甲府盆地最北端に立地する古墳である。往生塚古墳と天狗沢瓦窯跡、大塚古墳は調査され、天狗沢窯跡は県の指定文化財となっている。台地南南側には飯富氏屋敷跡など中近世の遺跡があり、信玄堤、霞堤が現在でも所々で確認でき本町から田富町まで続く。このように各時代ごとに多くの遺跡が分布している。



第2図　西山１号墳古墳周辺

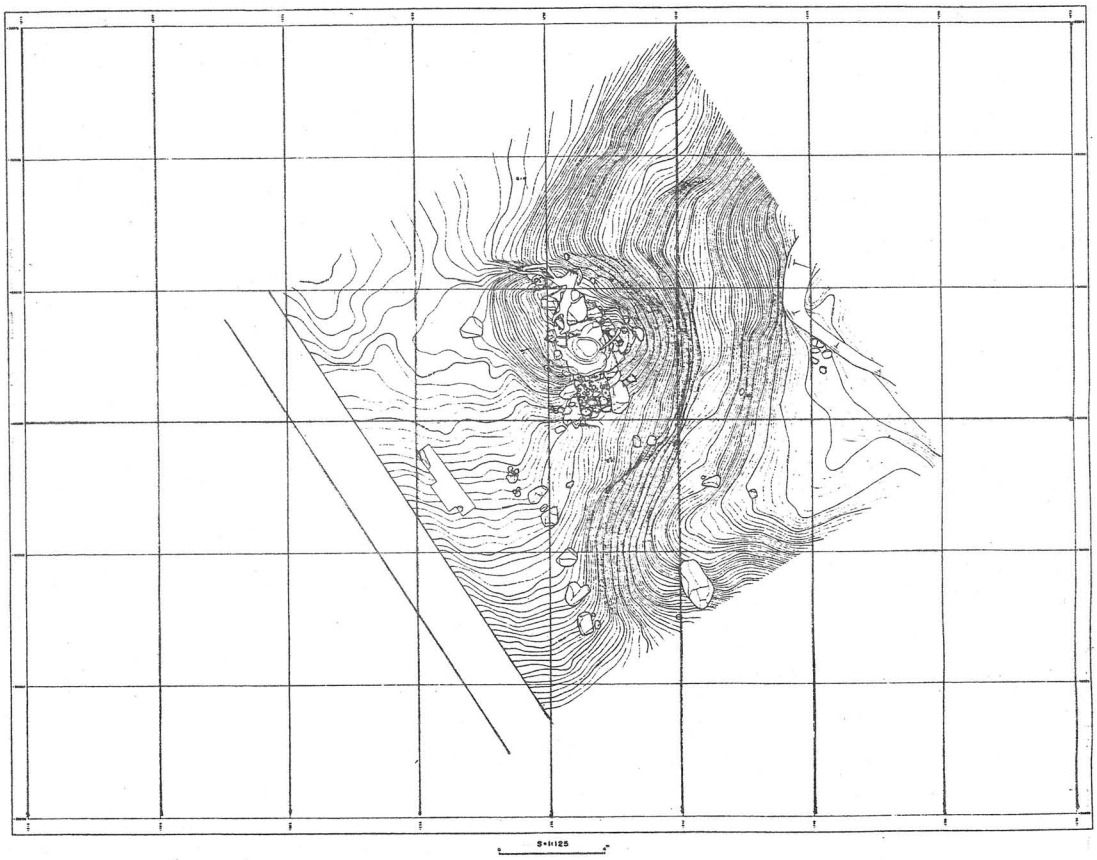
（1）西山１号墳、（2）西山２号墳、（3）西山３号墳、（4）中秣塚古墳、（5）狐塚１号墳、（6）狐塚２号墳、（7）往生塚古墳、（8）無名塚１号墳、（9）大塚古墳、（10）大平古墳群、（11）加牟名塚古墳、（12）湯村山古墳群、（14）狐塚３号墳、（15）丸山古墳、（16）四ッ石塚古墳、（17）両目塚５号墳、（18）両目塚４号墳、（19）形部塚１号墳、（20）形部塚２号墳、（22）両目塚１号墳、（23）両目塚２号墳、（24）両目塚３号墳、（25）片瀬塚、（26）新町狐塚古墳、（27）双葉二ッ塚１号墳（28）双葉二ッ塚２号墳（29）無名墳、（30）竜王二ッ塚１号墳、（31）竜王二ッ塚２号墳、（32）ヘビ塚古墳、（33）ネコ塚、（34）判家塚古墳、（35）狐塚古墳、（36）無名墳、（37）大庭塚古墳、（38）天狗沢窯跡、（39）金ノ尾遺跡、（40）松ノ尾遺跡

第２章　調査にいたる経過

西山１号墳は江戸時代にはすでに確認されていた古墳で、昭和初期に現在の県立農林高校にあった旧玉幡飛行場の建設あるいは現在のＪＲ中央線を開発する際に西山１号墳周辺の土を掘削したといわれている。昭和３０年代までは墳丘もあり残存状況は良好であったが、その後、放置していたため墳丘が崩れ奥壁及び天井石・側壁の一部が欠損した。また、樹木の根が墳丘や側壁などの礫の隙間に入り込み、石室が歪んできている。付近には小学校があり子供が古墳の中に入って遊んでいたこともあったので、このまま放置しておくことは危険であり今後の対策を検討するために調査を行うこととなった。

第３章　西山１号墳の概要

西山１号墳は竜王町竜王字西山６１８－１、６１８－２番地、標高３０１ｍにある。古墳の奥壁、天井石及び側壁の一部が欠損しており、東側の墳丘はほとんど残っておらず、裏込めも露出している。



第3図　西山１号墳全体図

昭和１１年に刊行された『中巨摩郡郷土研究』には無名塚Ｆとして紹介され「龍王村龍王慈照寺東にあり。石室のみを残し他の部分は開墾されて畑となり居る故その規模はすることを得ず。」、また、石室に関しては「間口 1.7 米、奥行 6.5 米、高さ 1.8 米、大石５個にて天井をなす。」とあり昭和９年に発掘と記載もあるため、昭和９年以前には既に石室は開口していたと考えられる。この発掘により玉類、須恵器片（瑞、提瓶、甕）が出土し、龍王小学校に寄贈したが現在では所在不明である。

内部構造

石室は無袖の横穴式石室で、規模は長さ約６ｍ、幅約 1.4m、高さ約 1.8mである。石室は奥壁、東側側壁及び天井石の一部が欠損している。また、閉塞部分については閉塞石がすべて取り除かれ、側壁からも羨門などが判断できず、閉塞部の位置及び範囲を確定できなかった。また、前庭部は今回検出しなかったが、付近の古墳からはすべて前庭部が確認されているので本古墳は掘削されたと考える。

天井石

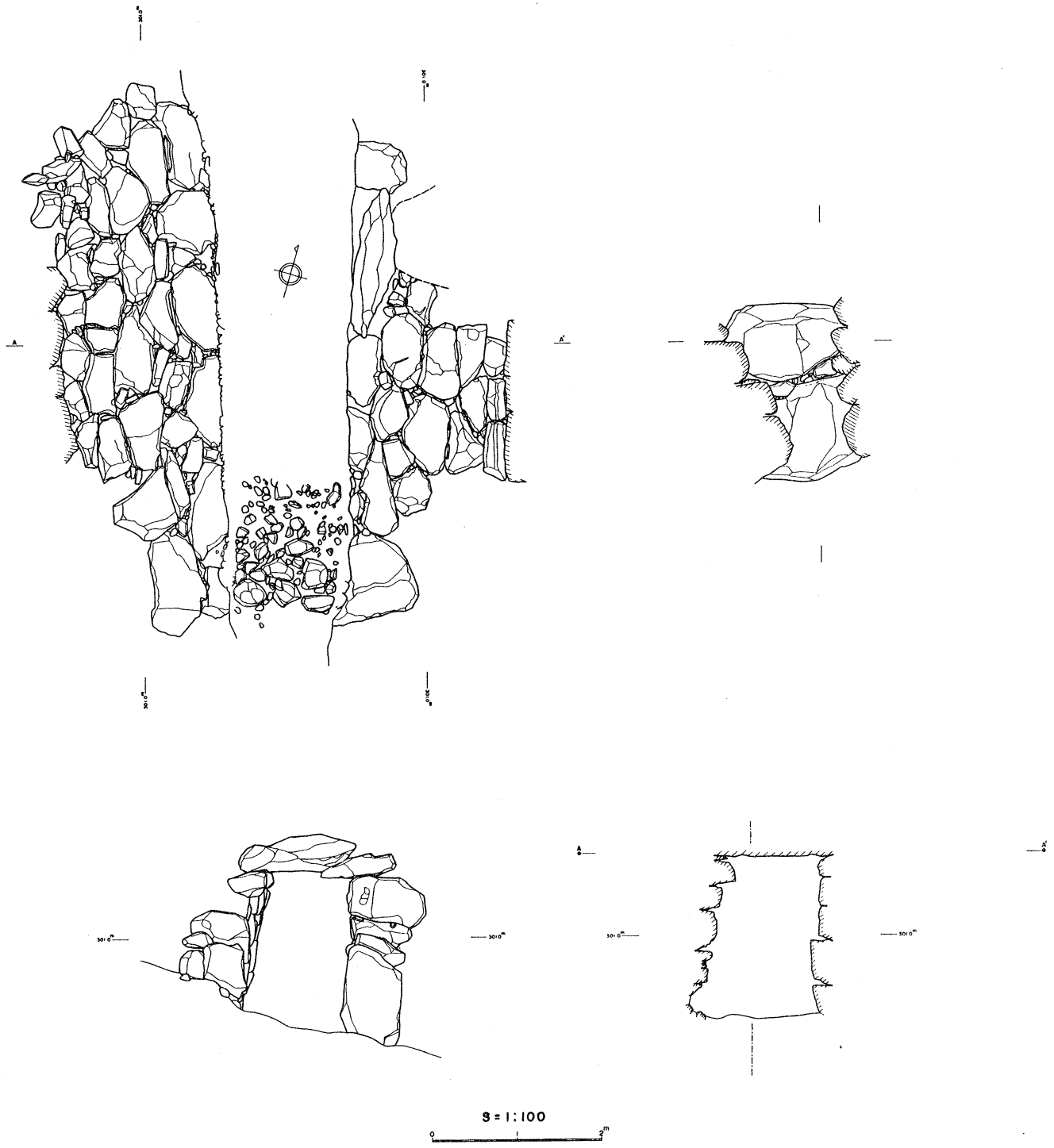
現在、天井石が確認できる古墳はこの西山１号墳と狐塚２号墳であるが、狐塚２号墳は天井石が動かされている可能性が高く、構築当時の面影をより強く残しているのは西山１号墳と考えられる。前述した、『中巨摩郡郷土研究』にみられるように昭和９年には天井石は五枚存在し、昭和３０年代後半まで残っていた。墳丘自体は現状とあまり変化はなかったと考えられるが、バランスの崩れと、雑木が生い茂ったために石室が一部崩壊したと考える。現在では崩壊した天井石及び側壁は検出しない。現存している天井石は三枚あり、そのうちの一枚は石室内へ落ちている。また、石室全体が歪んでいるために、天井石中央部分は東へ約 30cm ほど動いている。

側壁

側壁は五段に積み上げられている。まず基底部は礫を広口あるいは横口にして使用している。東側側壁最前にこの古墳では最大の礫を広口にし使用している。二段目は三段目の積み上げを安定させるため基底部に比べ小ぶりの礫が多く、バランスをとりながら積み上げている。三段目は 50ｃｍ以上の礫を横口と小口で積み上げ、四・五段目は小ぶりの礫を使用している。四段目は二段目と同様で、五段目の礫を安定させるためであるが、五段目は天井石と接するため小ぶりの礫を使用している。なお、四・五段目は小口積みが多い。

石室の状態は悪く、奥壁部から 2.5m ほど奥壁を含め東側側壁が基底部を除き欠落している。そのため、石室全体に歪みが生じ、西側側壁の半分ほど石室内部へ傾向しているのが顕著にあらわれている。

また、天井石は三枚残っているが、そのうちの一枚が東側の側壁が崩れた時に石室内に斜めになった状態で残っている。このことから、構築当初と状況が著しく変化しているため、石室の構築状態が何であるか確認が難しい。但し、赤坂台地で調査された古墳のほとんどの構造が持ち送りの無袖で、やや胴張りを



第4図　石室展開図・断面図

呈しているため西山１号墳についても同様の構造をしていたと考える。

一段目は横口あるいは広口でこの古墳の基礎を形成し、二段目以上は下部の礫に噛み合うように積み上げを行っている。このことについては、とりあえず石室の積上げが完了すれば良く、礫との隙間部分には小さい礫を埋め込み石室を安定させる。

礫床部分は長い間開口していたため石室内の攪乱が著しく、石室の半分以上が深いところで約30ｃｍ程掘り下げられている。そのため礫床はほとんどが抜き取られてしまい、側壁付近にわずかに残るのみである。羨道や閉塞部の壁になると付近の古墳とは異なり、玄室の側壁と同等以上の礫を使用し積み上げを行っている。

今まで調査した古墳からは、赤坂台地産出の礫か八ヶ岳産出の礫で構成されていたが、西山１号墳の場合、従来の礫のほかに川原付近から産出する玉状の小礫を使用していた。この川原付近から産出する礫は礫床にのみ使用され、ほかからは検出しなかった。礫床もほとんどが撹乱されているために前面を覆っていたか不明であるが、少なくともほかの古墳とは異なった礫の使用方法である。この古墳の場合、立地的にみて台地の先端に位置しているため、容易に収集できたためと考える。しかしながら、前述したとおり、礫床以外からの検出はみられないので、今後、未調査の古墳を調査することによって明らかにされると考える。落ちている天井石を取り除いた下から基底部の一枚が検出した。

墳丘

現在確認できる墳丘の層はⅩⅡ層までが確認できる。現状は高さ1.5m、長さ約３ｍを測り、土質は粘土質のため全体が絞まっている。墳丘と遺構確認面が土色、土質ともあまり変化がみられないが、Ⅸ層付近で土色に変化がみられ、締まりも強くなっている。

また、赤坂台地頂上部でみられる黒色スコリアは本古墳及びその周辺からは検出せず、スコリアが西山１号墳までは達していないことが判った。

列石は裏込めとの境界に存在するのみである。このため、墳丘内に礫が混入した形跡はない。

裏込め

石室は全体が東側へ傾向しているため、天井石の主軸も中心よりやや西側に寄っている。このことは東側墳丘がなく、裏込めも若干残る程度のためそれが影響していると考えられる。

石室の形態は無袖であるが石室が構築当時の状態で残っていないため胴張りであったかは不明である。ただし、赤坂台地で調査された古墳のほとんどが無袖、胴張りであることから西山１号墳についても胴張りであったと考えられる。積み上げ方も石室と同様に持送りと考えられる。

一段目の礫は横口あるいは広口で形成し、二段目以上は横口、小口で積み上げている。天井石を据えたときに側壁が安定するよう比較的大きな礫を小口に積み上げている。しかし、礫は均一のものはなく隙間なく石室を積み上げることは非常に困難であり、側壁の面を合わせればよく、礫の間に隙間には安定

させるための小ぶりの礫を詰める。

この古墳に使われている礫は山から産出した石と川原付近でみられる石と二種類の礫が検出する。石室についてはほかの古墳と同様に付近にある安山岩を使用し、礫床や裏込めも 10ｃｍ以上の礫については同様のものが使われている。10ｃｍ以下のものになると丸石が使われる。これは礫を多く使用するため、より安易に収集できる川原石を使用していたと考えるが、付近の古墳については割った石を入れているため、裏込めの場合礫が本古墳に比べやや大ぶりであるが土の混入の量も多くなっている。しかし川原付近の礫を意図して使用していたとすればやや大きめの礫が検出してもよいがそれらはみられない。

支群の形成

赤坂台古墳群を形成している支群には二種類の形態がみられ、西山１・２・３号墳、狐塚１・２・３号墳、両目塚１・２・３号墳、両目塚４号･形部塚１・２号墳、中秣塚･四ッ石塚･丸山古墳が該当する。両者に通じている特徴としては三基で一つの支群を形成している。違いが顕著にみられるのは各古墳の築造位置で、直線に並ぶものと、一箇所に密集しているものがある。それ以外に両者の折衷的な支群もあり中央道開発において消滅してしまった。二ッ塚１・２号墳･ふたん塚古墳があるが、この支群は直線に並びながら一部が密集している。また、単体で築造されていたり、二基のみのものも赤坂台古墳群全体ではみられ、特に古墳群北東にみられる。

但し、『中巨摩郷土研究』には西山１号墳周辺に一基あったが消滅してしまったと記載があるため、四基で　形成していた可能性もあるので今後の課題としておきたい。

その他

西山１号墳西側から６個の列石が検出した。礫の規模は石室の礫と同程度のもので古い加工痕が見受けられ、当初、墳端とも考えたが石室の主軸及び古墳と対応しなく、配されているところも地山よりＩ層上からの検出で、須恵器片も礫の下から出土しているため古墳構築後に設置されたものと考えるが、土地の境界としては数人で対応しなければならず、付近では溝を掘って土地の境界にしているものが多く、関連施設の有無等の確認が必要である。

出土遺物

『中巨摩郷土研究』には既に遺物が紹介され、須恵器片などは古墳の周辺に散乱していると記述されている。また、出土した玉類は曲玉（勾玉）とあり、今回も数点玉類が出土している。

本町での古墳の発掘は４件目になるが西山１号墳は長年石室が開口していたため石室内からの出土遺物は少ない。

石室から出土した遺物のほとんどが表土あるいは攪乱面から出土している。これは石室の半分以上が深

さ 30ｃｍにわたって攪乱されているためと考える。この部分はちょうど副葬品をおいているところである。

鉄製品では鉄鏃、鍔、刀子、釘が石室内から出土した。鉄鏃は頚部が多く石室が開口していた関係もあり錆の進行が早く、頭部と確認できたものは少ない。これらから判断すると鉄鏃の形式でいう平根式のものは出土していない。鍔は石室内から出土であるが石室内の攪乱がひどく表土からの出土であったため、ふるいで確認した。刀身は出土しなかった。

装飾品は切子玉、丸玉が出土した。切子玉は水晶製で綺麗に加工されている。大きさなどから６世紀第４四半期のものと考えられる。しかしながら、今回の調査では１点だけの出土であり、昭和初期に発掘した際にも記述を信ずるならば勾玉しか出土していないことなど。ほとんどが持ち去られていると考えたほうがよいのであろう。

また、須恵器は墳丘の西側から多く出土しているが、石室内などからも若干出土している。ただし、若干残っている礫床面からと攪乱面からの出土であり、特に石室内では近世の銭貨（寛永通宝）とともに出土しているため付近を掘り起こして出土したものを捨てたと考える。

須恵器は甕が多く蓋はつまみがない。中秣塚古墳の甕と比較すると叩き目に違いがみられ、特に当て道具が６世紀後半から７世紀初頭の特徴をもっている。このためＴＫ217、ＴＫ47、ＴＫ208 の甕が出土している。

鉄鏃は頭部がほとんどなく頚部が出土したため、この古墳に埋蔵された被葬者の性格は判断しがたいが、

須恵器：この古墳は一度発掘され長年石室が開口していたため遺物の出土状況はきわめて正確性に欠ける。石室内から出土する遺物はほとんどなく、石室内から切子玉、丸玉、鍔がそれぞれ１点出土したほか、須恵器片が古墳南西の列石西側から集中し、石室南側については散布していた状態で出土している。

Ｏ蓋：蓋は口径部のみであるが形態としてはつまみがないと考えられる。

Ｏ甕：８個体分出土している。叩目文は木目に平行に溝を刻んだものと、木目に直行して溝を刻んだものの２種類に分類できる。頚部が長いものと短いものがあり、櫛描き波状文、刺突文があるものも３個体出土している。焼成が不良のものが１個体出土している。

Ｏ提瓶：体部が出土した。頚部から口縁部にかけては検出しなかった。そのためこの遺物が長頚か短頚の提瓶か確認できなかった。

Ｏ銭貨：９枚の銭貨が出土している。熙寧元寶（1068 頃初鋳）（宋銭）１点、寛永通宝（1636 年初鋳）４点、鉄銭（年代不明）１点、また、鉄銭も１点出土（不明）している

Ｏ玉類：丸玉。直径約１ｃｍ

Ｏ切子玉：切子玉は１点出土し、水晶製である。六面体。高さ 2.1ｃｍ、最大幅 1.7ｃｍ、穿孔は最大

径0.4センチ、最小径は0.15〜0.2ｃｍあり、中心からそれている。面取りは十分に行われているが、各面の最大幅は0.6から0.9ｃｍである。

Ｏその他の遺物：陶器、陶磁器、磁器、茶碗、土鍋、内耳土器、石鏃が出土している。ほとんどが中世以降の遺物で石室内及びその周辺からの表層に確認がされている。あるが、縄文時代のものも２点ほど出土した。土器は破片で文様も確認できなかったため時期は特定できなかった。出土地点は裏込め部分の低部からの出土である。石鏃は、現在まで赤坂台地から出土した石鏃はすべて黒曜石であったが、今回での調査から出土した石鏃の材質は　　である。但し、表土内からの出土であったため流れ込みである。

まとめ

近年山梨県内でも古墳の発掘が盛んになり、最近資料も多くなってきている。現在、赤坂台古墳群は大型の古墳は知られてなく、最大でも長さ７ｍ程度の石室があるだけで、大型のものになると大塚古墳や加牟名塚古墳になる。釜無川の対岸にはおつき穴古墳（白根町）が所在し、これも中規模クラスの古墳である。また、通説として無袖型の石室は古墳時代後期でも最終のタイプになり、付近で同程度の古墳は湯村古墳群に確認できるが石室の形態は片袖のもので、赤坂台古墳群は盆地北西部で最後に造営された古墳と考える。

また、赤坂台古墳群は県内の古墳群に比べ、本格的な調査がなされないまま消滅してしまった古墳が多く、古墳群としての資料は少ない。

西は天狗沢窯跡を手中していた勢力がいたと考えているが、国分寺のように本拠となる寺院等が確認されていない。

西山１号墳の前を近世には御岳道が通り、本古墳付近に監視人がいたと地元の人から伺った。また、近世の貨幣や生活用品が石室内から出土していることなどから当時から
古墳の存在とともに使用されていたことが考えられる。

西山１号墳はじめとする赤坂台古墳群はどのように成立していったのだろうか。

はじめ、古墳が本県に構築されたのは甲府盆地南部にあたる曽根丘陵付近に前方後円墳あるいは大型の円墳が多く構築された。その後古墳の規模は小さくなるが御坂･一宮、山梨市・春日居、石和・甲府市東部、甲府市北西部、赤坂台など群集墳として確認できるものに少とも五ヶ所が挙げられる。

また、古墳の置かれた付近には地方で重要な施設があり、御坂・一宮には国府、国分寺（国分尼寺）、山梨･春日居には寺本廃寺、石和・甲府東部には川田瓦窯跡・桜井畑遺跡、甲府西部に　　遺跡、竜王には天狗沢窯跡があり、力を持った豪族が分散していたことが伺え、各地に古墳群が構築された要因になった。

西山１号墳は赤坂台地に点在する古墳のなかでは低地に構成された古墳である。古墳群のなかに支群と小支群があるが古墳構築に際し優劣があるのか考えてみたい。

赤坂台古墳群が始めて本格的な調査を実施したのは 1978 年になり、20 年以上経った 1996 年に中秣塚古墳が調査された。1978 年の調査では５基の古墳を調査し、ほとんどの古墳から平根式の鉄鏃、馬具が出土している。中秣塚古墳からは馬具はなくかわりに直刀、尖頭指式の鉄鏃が多く出土した。西山１号墳は撹乱を受けていたためか鉄族、鍔が出土した程度である。但し、実用性はない平根式の鏃は出土しなかったことを考えると中秣塚古墳と同じレベルの豪族が埋葬されたと考える。また、中秣塚古墳と本古墳は装飾品が少ない。各古墳の形態を見る限りでは前庭部の違いはあるものの古墳後期の形態であり古墳の規模も 15m前後と同じレベルである。中央権力の衰退、古墳の地方への普及に大型の古墳は作られなくなり、地方豪族が中央に真似てつくってったのではないであろうか。

参考文献

末木健　1979　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡双葉町地内―１』　山梨県教育委員会
末木健　1979　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡双葉町地内―２』　山梨県教育委員会
小林和弘　1987　『四ッ塚古墳群　山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　山梨県教育委員会
末木健　1987　『金の尾遺跡・無名墳（きつね塚）山梨県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書』　山梨県教育委員会
櫛原功一、大嶌正之　1990　「敷島町狐塚古墳と採集遺物」『丘陵 13 号』
山田邦和　1998　『須恵器生産の研究』　学生社
田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店
山梨県史編纂委員会　1998　『山梨県史　資料編１　原始・古代１・考古（遺跡）』　山梨県
末木健　1986　『大塚古墳』　敷島町教育委員会
大嶌正之　1994　『遺跡詳細分布調査報告書』　敷島町教育委員会
長野県史編纂委員会　『長野県史』　長野県

報告書抄録

ふりがな	にしやまいちごうふん
書　　名	西山１号墳
副 書 名	
シリーズ名	竜王町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第３集
編著者名	皆川洋
編集機関	竜王町教育委員会
所 在 地	〒400－0192　山梨県中巨摩郡竜王町篠原 2610　TEL 055－278－1675
発行年月日	1999 年 3 月 17 日

所有遺跡名		コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
西山１号墳（にしやまいちごうふん）	山梨県中巨摩郡竜王町竜王字西山618-1、618-2 番地	193810		19980525～19980721	200 ㎡	遺跡崩壊

所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西山１号墳	古墳	古墳時代後期	古墳　　１基	須恵器・陶磁器 磁器・鉄鏃 刀子・鍔・銭貨	